

## 講演要旨

**1. 「カラコルムの地図作成小史と、今西さんのカラコラム探検の頃」 — 国土地理院「今西錦司  
企画展」講演資料より — 国土地理院客員研究員、(財)日本地図センター 長岡 正利**

先の国土地理院企画展での講演資料に基づくもので、当時の地図・史料と現地写真により、次についてご説明。

- ① 「大英帝国(インド)と、南下政策をとる帝政ロシアとの角逐の場であったカラコラムでの地図作成史(ごく概説)。
- ② 今西錦司さんが関わった海外調査と探検・登山活動(戦前と戦後復興期)。
- ③ 昭和30年「京大学術探検隊」(そのうちの、カラコラム・ヒンズークシュ探検)の事績紹介。
- ④ カラコラムの探検・地図作成史を彩った人々(写真紹介)。

**2. 「雲南省徳宏タイ族の宗教」—シャマニズムにおける 声の文化—**

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程、アジア民族楽器演奏家 伊藤 悟

タイ族といえば上座仏教というイメージがあるが、国家も公認する「宗教」以外にも、徳宏タイ族の地域社会では「原始宗教」や「迷信」とされる精霊信仰やシャマニズムが仏教実践と絡み合いながら人々の日常生活を形作っている。今回はタイ族の世界観を織り成す「声」(うた)のあり方に注目しながら徳宏タイ族のシャマニズムを紹介する。

**3. 「魚附林の地球環境学」—親潮・オホーツク海を育むアムール河—**

北海道大学低温科学研究所准教授/総合地球環境学研究所准教授 白岩孝行

魚附林。岸辺の森から流れ出す栄養分が沿岸に藻場を作り魚を育むことを指す言葉です。我々の研究により、アムール河流域が、オホーツク海や北部北太平洋親潮域の巨大な魚附林になっている可能性が浮かび上がってきました。アムール河からもたらされる溶存鉄が基礎になって、世界に冠たるオホーツク海や親潮の豊かさが維持されているのです。しかし、このシステムにも温暖化や人為的な擾乱による影響が現れ始めています。漁師が山に植林したように、最下流に位置する日本が上流の国々に呼びかける活動が始まりました。

**4. 「雲南の栽培植物」— 麦・瓜・里芋など —**

(前)中国科学院昆明植物研究所客員教授、(前)岡山大学農学部特別教育研究員、

(財)進化生物学研究所客員研究員、AACK 吉野熙道

原人とヒトは出アフリカ以後、暖かく食料を獲得しやすい地帯を通過して世界に拡散していった時に、南西中国つまり雲南の地を通過したにちがいない。そのかなり早い時期から、アフリカや中近東、インドなどで得られた植物を持ち運んだのも当然と思われる。

ここでは中国科学院昆明植物研究所と岡山大学を中心とする日本の諸大学・研究機関との共同研究に基づいて行った、麦・瓜・里芋などの栽培植物と近縁野生種に関するフィールドワークの成果のごく一部を紹介する。